

芥川龍之介研究

——堀辰雄へのつながり——

福水明人

芥川文学は芥川の死でもって終焉する。この死は当時異常なまでの反響をよび起した。だが彼の死後、現代文学において芥川文学の作品系流を見いだすことはできない。大正文壇と彼の位置を考えると、私はこのことを奇異に感ぜざるを得ない。彼の文学は後代のどこに痕跡をとどめたのか。堀辰雄の「芥川龍之介は僕の最もよい先生だった」ということが私にこの解決の糸口を与えてくれると思う。芥川文学が後代に与えた影響一般ではないが、芥川文学と堀文学の関係をつかむことは、芥川文学の継承という問題解決にとって無意味ではない。ここで私は「芥川文学から堀文学へ」という課題が与えられた。

である。芥川文学は芥川自身の才智と教養でもって広範な素材領域を誇りながら、そこに虚飾が感じられ（晩年の文学ではかなりとり除かれるが）、その鋭さに驚嘆こそすれ魂的なものに触れ得ないのに対し、堀文学は作家の苦悶する魂が作品化されている。芥川文学が作家個体の發展を感じさせないのに比して、堀文学は堀の人間の成長過程を象徴していると言える。このことは堀文学が求心的な自己の人生追求の文学でありながら、その作品における領域のせまさをひきおこしている。芥川文学の散漫ではあるが広範な文学領域に比較して、堀文学の世界はせまいと言わざるを得ない。

ではこのような相違を持つ、むしろ対照的な意味で異質な芥川文学と堀文学の継承の接点は何であるか。「彼は最後に、彼の死そのものをものをもって、僕の眼を最もよく開けてくれたのでした。」^②という堀辰雄の暗示的なことばがある。堀自身が言うように、この両文学の接点は芥川龍之介の死にあると言えよう。芥川の死が堀文学に与えた影響を述べる前に、私は芥川の死について考察する必要がある。

芥川文学は前期後期の二期に分けることができる。時期的にみれば、その前期は大正五年から大正十一年の間であり、後期は大正十二年から昭和二年までである。前期は「鼻」「芋粥」などに代表されるいわゆる歴史小説が活動の中心であり、後期は「保吉の手帳から」にはじまり「或阿呆の一生」に至る、告白的色彩の強い作品群である。この前期後期の作品群の中間項として、私が「秋」路線とよぶ作品群^③が存在するが、ここでは触れれない。前期の歴史小説群の特色は、鷗外の歴史小説と比較すれば明瞭である。鷗外の歴史小説が彼の歴史の真に対する歴史科学的態度と文学との高度の調和によって、「歴史其俚」^④の史伝ものの境地にまで達したのに対し、芥川の歴史小説は、歴史を素材としたテクニカルな小説である。彼自身も言っているように「自分が持っている主題を自然めかすために、歴史に舞台を求めたに過ぎないのであ

る。そしてこの主題を活かすために、小説における形式いわば構成（＝虚構）が非常に重要視されるのがその特色である。この構想性は時に主題をすら圧倒し、主題そのものも芥川が真に苦悩している問題とは思えない、一種思いつきのなものが見られる。だがこの前期の作風は後期において変貌する。後期の主流となる作品は保古物を経た後に現われる「点鬼簿」「西方の人」「齒車」「或阿呆の一生」などの系列である。これら後期の作風の特徴は、前期とは逆に、芥川の苦悩が前面におしだされていることである。と同時にこれらの作品は断片的で構成を持っていず、小説とは言いがたい作品となっているのである。これら告白的作品群の延長線上に彼の自殺があったのを思うとき、彼の死の要因は前期から後期の作風の転換の中にあると言えよう。

ところで芥川の作家としての出発点は歴史小説であった。宮本氏は^⑥このこと理由づけとして、鷗外の影響にふれたのち、芥川の性格に重点を置いた見解を述べられている。だが私はこれにもっと重要な意味を付与したい。大正初期に文壇では鷗外の歴史小説の影響により一時歴史に題材を求めた小説が流行

した。芥川が歴史小説を書いた裏にはこの鷗外の影響がある。ではなぜ影響を受けながら、芥川は前述したような鷗外と異質の作品を書いたのであるか。芥川の文壇登場期の大正五年頃は、従来の近代の日本文学の伝統である自然主義に対する反抗の風潮が文壇を支配していた。唯美主義運動、武者小路を中心とする人道主義運動がこれであり、後者はこの中核であった。武者小路の出現を「文壇の天窓を開け放つて、爽やかな空を入れた」^⑦とする芥川もまた反自然主義の一団に属していた。日本の自然主義は、西欧自然主義を受け入れる際の断層を基盤として、日本文学独特の私小説、さらには心境小説を生みだした。これから推察されるように、自然主義文学は小説における虚構を排斥した無構成の文学である。芥川はこの自然主義文学の方法に対抗して、虚構を彼の文学方法としたのである。

と同時に、明治という混乱の時代の後に一応の平穩な情勢を迎えた大正時代は、時代独特の合理主義を生みだした。明治期の知識人特に阿部次郎の人格主義的思考態度は、大正知識人に共通したものであった。芥川の歴史小説は「歴史を犠牲」^⑧とし、「歴史を寓意化」^⑨した作品である。これは歴史の合理化であ

る。芥川における合理主義的思考態度がここに反映しているのである。芥川が鷗外の影響を受けて歴史小説を書きながら、鷗外と自己の作品との相違を不思議としなかった裏には、文学方法における私小説への挑戦意識、大正時代特有の合理主義的論考の影響があったのである。私は、芥川の出発点が歴史小説である背景に以上三つの要因を位置づけた上で、芥川の性格を添加したいと思う。

反自然主義風潮を背景とする芥川文学は、前述した如く後期において変化する。後期文学に看取できるのは私小説への挑戦の際の盾であった虚構の放棄である。これは芥川文学の私小説に対する敗北である。なぜ芥川は虚構を放棄したのか。芥川文学の前には、めざすところは異なるにしても鷗外の歴史小説があり、志賀の文学があった。これら二者の文学と比較する時、芥川文学は脆弱さを露呈する。芥川は自己の文学に弱さ、いわばこしらえ物の意識を持っていた。「奉教人の死」を評した志賀に対して、芥川が「芸術といふものが本統に分つてゐないんです。」^⑩と答えたことは、これをうらづけるとともに、私小説的方法で重厚な文学を形成している志賀に対する芥川の低頭を意味している。こしらへ

物の意識から出発した芥川の自己の文学への懷疑は、結果としてその文学の特色であった虚構を放棄さすのである。文学の虚構性が概念として確立している欧米では、作家はたとえ自己の文学に弱さをもとめ懷疑を持って、文学の虚構性を疑うことはない。彼らには自己の虚構をより完全なものにするという指標がある。だが志賀文学の堅牢さを前にした芥川は、その懷疑の目を虚構性そのものに向けた。彼は自己の作品の脆弱さを虚構のものに託したのである。この自己の虚構の不十分さの看過から文学の虚構性の懷疑への屈折の背景には、近代日本文学伝統における虚構の不確立があった。近代日本文学の伝統は自然主義に始まり、私小説の出現とともに読者も含めて、文学における虚構を拒否する日本独特の私小説的伝統であったのである。このゆえに芥川は欧米作家が持つ指標を持ち得なかったのである。

この前期文学における虚構の放棄と平行して、彼の芸術観も変化する。初期のそれは全ての芸術活動を芸術家の意識の支配下に置き得るとする意識的芸術活動^⑩である。この芸術観から前期文学における形式重視が誕生したのである。だが後期のそれは、初期とは対照

的な、芸術活動において芸術家の意識を越えたものを認める無意識的芸術活動^⑪である。そして前期文学で最も話らしい話のある小説を書いた彼が、話らしい話のない小説^⑫を主張する時に、ここには皮肉以上のものがある。つまり後期の文学および芸術観は前期のそれらを自己否定するのである。この後期文学の否定にもつながる。「戯作三昧」「奉教人の死」の中から推察できるように、芸術至上主義的人生観の上に立つ彼の人生は、「芸術に奉仕」^⑬された。そして芥川の場合奉仕は犠牲を意味する類のものであった。芸術創造のために犠牲にされた人生は、その犠牲を芸術により補償されねばならない。しかし彼の文学は自ら否定されるものとなった。彼に残された人生は補償のない残滓であった。さらに彼は人生を生きることにしても志賀に敗北した。「志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてゐる作家の作品である」^⑭。自己の芸術が否定され、結果必然的に自己の人生が否定された芥川に残されたものは死以外のものではなかった。

文学に生かしたかである。堀は芥川の死に最大の影響を受けた。堀は、芥川が自己の弱さを世間に隠しながら、そうすることでかえってその気弱さにたえられなくなる性格であった故に、芥川の悲劇があったとする^⑮。こうした気弱さの点で芥川と性格的類似を自覚した堀にとって、芥川の死は自己の危機であった。この危機を乗り越えるためには、堀は芥川の弱さを隠そうとする人生態度とは別の態度を取らねばならない。「そこで彼とは反対に、さういふ気弱さを出来るだけ自分の表面に持ち出そう」^⑯という、芥川の裏面を表面とした堀の人生態度が決定されるのである。そしてこの人生態度は堀文学の方法と密接な関係を持つ。つまり堀は文学の核として、人生において自己が最も悩める問題、いわば苦悩する自己の魂を位置づけたのである。このことは堀文学が堀の人生体験と密接な関連をもって展開されているのをみれば明瞭な事実である。そして堀の魂を支配した問題が死・生・愛であった。芥川の死、自分の肋膜炎による瀕死の体験さらには結核による生涯の死の不安との闘い、この死への不安と表裏して存在する生への欲求、学生時代の失恋および許婚者矢野綾子への愛と彼女の死、これら

は堀の魂を揃えて離さぬものであった。この死生愛の主題が堀文学の世界を一貫して流れている原因も、前述した堀の文学方法と考へ合わせれば首肯できよう。つまり堀文学は堀の人生遍歴の記録であると同時に、自己の悩める魂の鎮魂でもあったのである。

堀はこれらの主題を彼が住んだ信州の田舎を舞台として、彼の文学の世界を形成した。これは従来私小説の方法と異ならない。だが堀文学はいわゆる私小説を感じさせない。

ここにいま一つ堀が芥川から受けついでものがある。堀は晩年の芥川の告白的作品が小説形式を喪失しているのを看過しなかつた。文学の核に魂を位置づけた堀は、告白だけの悲劇を芥川の死の中に見ていた。堀は自己の最も求心的問題を核としながら、芥川文学の特色である小説の構想性をこれに付加したのである。「聖家族」「菜穂子」の主題の展開の中にみられる知的構想性こそ、一見私小説的にみえる堀文学と私小説との間に一線を画するものである。堀は芥川文学の虚構を復活したと言えよう。

堀文学の芥川文学継承は、「自分の先生の仕事を模倣しないで、その仕事の終ったところから出発するもののみが真の弟子であるだ

らう。芥川龍之介は僕の最もいい先生だった。」^⑮ という堀のことに象徴されるように、芥川文学の亜流的作品を残すことではなかつた。芥川が小説の形式を重視し、作品完成をめざしながら、漸次自らこの形式を捨てて魂の表出に向つたのに対し、堀は芥川の終点である魂の表出を作品創造の中核として、芥川文学の構想性に迫って行つたのである。堀の人生態度は芥川の態度の裏面を表面とすることであり、この人生態度と有機的な関連をもつて生まれてきた堀文学の方法は、芥川文学の方法の逆行であつた。そしてこの堀の人生態度と文学方法の母胎として、芥川の死があつた。言うなれば、堀文学は芥川の死の洗礼を受けて誕生した文学であつた。

註 ①「詩人も計算する」②「芥川龍之介論」③「秋」④「お律と子等と」⑤「庭」⑥「一塊の土」⑦「支鶴山房」⑧「稲垣達郎「歴史小説家としての芥川龍之介」」⑨「燈江堂雜記」の「昔」「歴史小説」⑩「宮本百合子「芥川と菊池の歴史小説」」⑪「あの頃の自分の事」⑫「成瀬正勝「芥川と鷗外」歴史小説を中心に」⑬「芥川龍之介の生涯と芸術」にも同意のことが書かれてゐるがこの言葉はみえない。⑭「志賀直哉「杏樹にて」」⑮「芸術その他」⑯「文芸的な、余りに文芸的な」⑰「同前」⑱「芸術その他」⑲「文芸的な余りに文芸的な」志賀直哉氏

⑮「同前」⑯「詩人も計算する」
(本学四年生)